



ねこまた



星野トイ

俺はどうやら生まれ変わったようだ。だが久しぶりに見る景色は今までと大差ない。茜色に淡く輝く瓦屋根も、きゃっきゃと騒ぎながら駆けていく子供たちも、そよ風に揺れる一面の白い蕎麦の花も、長い影を落とす電柱やガードレールも、どれもこれもが根本的には以前と変わらない。ただ猫である俺が人間の言葉を解し、ふたつみつつの妖術を身につけただけである。おっと尻尾も一本増えたのだった。が、それもたいしたことじゃない。つまり、今日も昨日と一緒の一日。厳密に言うと少しずつ変わって、長い目で見ると恐ろしいほどの変化が生まれるのだけれど、やはり実感としては今日も昨日と同じだ。こうしてブロック塀の上を歩いている俺が猫であろうとネコマタであろうと、世間には何の影響も及ぼさん。おおいに結構。俺は無常を好まない。いついつまでも今日が昨日であってくれたなら、それは幸せと呼べるのではないか？ なるほど夕日が目に沁みるとはこのことか。くすんだ赤色の首輪に付いた鈴がシャンと鳴った。これも昔は本当に真っ赤だった。

ちよっかいをかけてくる少女を無視して歩いていると近所の飼い猫と遭遇した。名前は確か...ミカだったかミケだったか、ミコだったか、なんかそんな感じだ。歳は若く、まだ三歳だかそんな。百を越えた俺からすれば子供も子供。相手するのもアホらしい。それにしても野良を見なくなるとどれほど経つだろう？ 猫も犬もすっかり飼われた連中ばかりになってしまった。あいつらには手を焼かされた。臆病で弱虫だった俺は右耳を噛み千切られた。それ以来、野良の連中が恐ろしくてたまらなかつたのだが、今から思えば奴らも怖かつたのではないか？ なんせ奴らには明日が保障されていない。食い物が無ければそれまでの命。そんな不安の中で生きねばならぬ奴らに今更ながら同情できる。そして野良が街からいなくなったこの現状に恐ろしさを感じる。どこへ行った？ 町の裏影や山の奥でもひっそりと生きているか？ いいや、きっともうどこにもいない。俺は知っているぞ。人間が捕まえて殺したのだ。かと言って俺は人間を非難したりはしない。みんなそうやって己の生活を守るのだし、なんといっても俺を百まで生かしてくれたのは人間なのだから。

そもそも俺も元は野良だった。遠い記憶を探るともっとも奥深くにあるのは母の尾である。俺の兄弟の世話か何かをしていた母の尾がゆらゆらと揺れているのが俺の最古の記憶。こげ茶の毛並みは荒れていたが、それを汚いとは思わなかつた。むしろそれこそが母の象徴でいまだに追い求める理想だった。

次の記憶は母と兄弟による当てのない旅。あの頃の間人はわりかし裕福な生活をしており、食べ物はそこらにあった。だけれど俺たちのような連中も多くて、まともな食べ物は当然ながら争いで勝ち取らなければならなかった。母は体が大きくそこらの野良には負けなかったのだから、いつもそれなりに食べ応えのある食べ物を俺たちに与えてくれた。俺たちは素直に喜んでいただけだけれど、それが逆に母へ重圧を与えていたのでは？ と今更ながら思う。母は人間宅へ忍び込むようになってしまった。まだものを知らなかった俺や兄弟はそれがいかに恐ろしいことなのか知らなかった。人間はのろまだが賢い。母は罠に捕まり、これまでの粘りっこい生を否定されるがごとくあっさりと処分された。俺たち兄弟はそれを庭の草場から見ていることしかできなかった。それからは大変だった。食べ物の確保を母に頼り切っていた幼い俺たちに他の野良と争うことなど無理だったからだ。兄弟たちは次々と動かなくなり、俺もそうなるのだと覚悟していた。

「まあ、かわいい」と声をかけてきたのは人間の少女。しかし俺には爪を立てる力はおろか牙をむく力さえなかった。差し出された両手に沈んだところまでは覚えている。次にある記憶は暖かく柔らかいシーツの敷かれた木箱の中。パチパチと木の爆ぜる音が耳に心地よかった。すると俺は不意に持ち上げられた。ぐったりとした身体で目だけを動かすと朱色の着物を着た少女の顔が俺を覗いていた。膝上に乗せた俺の背中をゆっくり優しく撫でた少女は良い匂いのする粥を匙ですくって与えてくれた。どれだけぶりの食事だったろう。俺はむせながら無様にも必死にがっついた。そんな俺をたしなめながらも少女は嬉しそうに笑った。その時に出た粥は俺の好物になった。

少女の名は満（みつ）と言った。満の家はなかなか大きく、使用人も五人はいた。そんな裕福な家でありながらも満の父の動物嫌いからその家に俺の居場所はないらしかった。けれど満は居場所を作ってくれた。俺にネズミ退治の仕事を与えたのだった。もちろん俺には仕事に対する責任や、そもそも働くという意識はなかったが、本能のおかげで成果を上げることが出来、その家に居続けることができた。

満が結婚したのは二つほど年を越した頃だった。何も知らなかった俺は家から突然満がいなくなった事態に恐怖を覚えた。台所、風呂、庭、勝手口、二階にある満の部屋、家中を探しても満の姿はどこにもないのだからあっさりとして殺された母のように死んでしまったのではないかと思ったのだ。大きな満月が、並ぶ瓦屋根に黄色い筋を付けた晩、冷たい屋根に上った俺は満が姿を

消す前にいやにじっくりと可愛がられたのを思い出して余計に胸が苦しくなって、震える喉をギュツと絞り「みやあみやあ」と小さく鳴いた。

ぼんやりと過ごす日々を送っていたある日、頭のとっぺんが禿げ上がった大男がやってきて満の家族と何やら話をすると俺は使用人によってカゴへ入れられ大男に渡された。そして大男は家の前の道に停められていた自動車に乗り込んだ。いつも俺を邪険に扱う満の父が頭に浮かんだ俺は危険を察知して逃げ出そうと考えたがカゴは小さな俺の力じゃビクともしなかった。次第に俺は諦めて、どうせ満も死んでしまったのだしどうにでもなれ、と自暴自棄になってカゴの中で寝そべり、ガタゴト揺れる車に酔ってかいつの間にか眠ってしまった。

心地よい夢を見た。満の柔らかな細指に額をゴシゴシと撫でられる夢。夢が次第に遠のいて、代わりに現実がやってくる。意識がまだハッキリとしない頭で目を薄く開く。額にはまだゴシゴシと撫でられている感触があり気持ちよかった。

「あら、目を覚ましたわ」

その言葉に耳がピクンと反応して眠気が飛んだ。俺の大きな目に映ったのは随分と久しぶりの満の笑顔。まだ夢を見ているのだと思った。でも興奮が抑えきれられずはしゃぎまわって満の身体にじゃれついているうちに夢ではないと確信し、あの時の俺は真の幸せの中にいた。

「今回、子供が駄目だったのは、神様がまだ早いと考えられたからだよ」

部屋の隅にいた眼鏡をかけた男に俺は気づいた。

「そう言って頂けると救われます」

満は俺をギュツと抱いて、俺の額に頬をあてがった。頭に滴が落ちた。満の吐息が悲しかった。そして俺はこの日より満の嫁いだ先で暮らすこととなった。

その家は満の実家よりは小さかったが周りの家と比べると立派な方だった。住んでいたのは満と満の夫、満の夫の両親、そして禿げた頭の大男とその妻である使用人が二人、と俺。みんなが優しく笑顔の絶えぬ良い家で、日々何事もなく過ごしていたのだが、いつからか満の笑顔に影が見え隠れするようになっていたのに俺は気づいていた。特に満と夫の寝室「焦ることはないよ。子供は天からの授かり物なのだから」と夫の優しい声がした後に殊更影が強くなる気がした。家族にも俺にもその影を取り去ることはできなかった。

満がその影を持ったまま時が流れた。それは身体はいたって健康であるのに喉に魚の骨が刺さったままになっているような気持ちの悪さのある時間だった。そんな空気が一変したのは一つの何とかという時代が終わりを告げ、新しい時代がやってきて少し経った頃だった。満から影が消え、家中がパッと明るく華やいだ。俺だっていつの間にか家族の一員さ。理由は分からなかったがただ嬉しかったさ。こう、気分がウキウキして用もないのに廊下を走り回ったっけ。そのうち満の腹がふくれた。腹の中には何者かが入っているらしく、満は俺にそうするように自分の腹を愛おしく撫で、優しく話しかけていた。正直に言うと俺は嫉妬した。けれど満の清々しい灰汁の無いたただただ純粋な表情を目にすれば俺は耐えることができた。満が幸せならそれは素晴らしい。

庭の紅葉が暗闇にまぎれて真っ赤に燃えていた晩、満が急に腹を押えて苦しみだして家が騒がしくなった。その苦痛に歪む顔は尋常でなく、とても痛々しかったが、何も出来ない俺は走り回る家族の足元でちよろちよろするだけだった。そうして気が動転したまま焦っていると見知らぬ老婆が現れ、女連中が一室に閉じこもった。俺は満の夫に抱えられ肌寒い庭へ出た。満の夫は玉砂利をジャツジャと踏んで右へ行ったり左へ行ったり落ち着かない様子。しかしそれは俺も同じだった。月はなかったが星が多かった。満の夫の眼鏡にたくさんたくさん星が映っていた。次第に空が白んできて、星は輝きが強いものだけが残った。そして空はピンクになって、赤くなって、家々の屋根の輪郭を輝かせながら朝日が射した。紅葉についた露がキラキラ光った。俺は縁側に腰かける満の夫の胸からまぶしい朝日を目を細めながら眺めていた。その時である。甲高い声が朝の静寂を裂いた。満の夫は反射的に立ち上がり満たちがこもった部屋へ向かった。襖が開いて女中が出てくると、その顔は泣きそうな笑顔で「旦那さま、女の子です。とても元気そうな女の子ですよ」と言った。俺は満の夫にほっぼり出されて、トタトタ廊下を蹴ると部屋へ入った。髪が乱れ憔悴しきった様子の満が、しかし飛びっきりの慈愛の表情でとても小さな人間を抱いていた。

「よくやった。よくやった」

満の夫も部屋に入ってきて満の傍らに膝を立てると満の肩を抱き、ぎゃあぎゃあと泣く小さな人間の頬を突いたり手を握ったりした。騒動が落ち着いた頃、街の至る所から「万歳、万歳」の合唱が聞こえた。俺は満たちを称え祝っているのかと思っていたのだが、どうやらその日は新しいショウワという時代のテンノウとやらがソクイする儀式があったようだ。なんにせよ、みんなが笑顔の日は気分が良い。その晩、親戚を集めて酒に酔った満の夫は小さな人間に珠子（たまこ

)と名付けたのだった。

珠子はすくすくと成長した。生まれたばかりの頃は騒ぐだけで自分じゃ動けなかつたくせに成長するにつれ行動が活発になった。その一番の被害者は何といても俺だろう。言葉を話せるようになったものの力の加減ができない珠子は俺の頭を強く打ん殴るし、尻尾も幾度となく取れるのではないかと思うほどに引っ張られた。その度に満から注意されるのだが、数時間も経てば忘れてしまい、俺を見つけては追い回すのだ。さすがに辟易とした俺は珠子が起きている間は家から避難していた。正直嫌いだった。ある時、珠子のいたずらにいらついていた俺は普段の行動範囲から飛び出して隣町まで足を伸ばした。いつもと違う雰囲気は新鮮で、見知らぬ風景に気を取られ、怒りも忘れてあたりを眺めまわった。たまにはこんな遠出も良いものだ、とウキウキしながら歩き、さすがに疲れ、草が伸び放題になった空き地の隅に置かれていたバケツに溜まっていた水をペロペロとやっていた時だった。ハッと気づくと三匹の猫に囲まれていた。三匹ともが俺のような飼い猫にはないピリピリとしたたくましい気配を隠すことなくまとって、そいつらが野良だとすぐにわかった。しかも奴らの俺を見る目つきや尻を上げ前のめりになって地面にグツと前足の爪を立てている姿勢から激しい敵意も伝わった。野良だった頃の記憶がわきあがって鼓動が速くなった。恐怖に縮こまるしかない俺に一匹が近付いてきて、ピシヤリと頬を叩いた。それでも怯えて反抗できない俺を格下に見たのか他の二匹もやってきて俺の背中や足に爪を立てて噛みついた。朝には命の危険のない家で満の用意してくれた粥を食べていたのだ。夢ではないかと思った。しかし、頬を叩いた猫が俺の右耳に噛みついて引き千切った時、みっともなく悲鳴を上げながら、夢ではない、殺される、と痛感した。一旦離れた三匹が痛みに転げまわる俺を蔑んだ目で見ている。それは俺が野良だった頃、餌を確保できなかった時に周りから投げかけられた視線そのもの。もう駄目だ。諦めの境地に達すると一陣の風が吹いて辺りの空気がひんやりと重たくなった。他の三匹もそれに気づいた様でやけにそわそわしだして周りを見渡した。俺は見た。ゆっくりとこちらへやってくる真白い猫だ。細くて小柄だが堂々とした態度で揺れる草の中を歩いてくる。草の踏む音で三匹も真白い猫に気づいた。すると何やら落ち着かない様子になって、ついには蜘蛛の子を散らすように散り散りに逃げだしてしまった。俺は逃げなかつた。いや逃げられなかつたんだ。

「随分と懐かしい匂いがする」

真白い猫は俺に向かって何やら鳴いたが、俺には何を言っているのかわからなかつた。俺の前までやってきた真白い猫は俺の額を舐めた後、尻を向け、長い尾で傷口を撫でた。尾は二本あった。たったそれだけして真白い猫はそのまま去って行った。空地の空気が元に戻った。呆気に

とられていた俺が我に返ると体の痛みが引いているのに気づいた。状況を理解は出来ないが命が助かったのは事実。もう怖い目には遭いたく無いと、俺は来た時とは違って逃げるようにそそくさと自分の住む街へ向かった。家に帰ると朝とは違う俺の風貌に家の連中は驚きを見せた。満は不安げな表情で俺の体を調べ上げ、もう痛みのない傷の手当をしてくれた。そして珠子はわんわんと声をあげて泣いた。うるさい奴だと思ったが、その涙が俺を思っただけの涙だと言うことは、その日ずっと俺を抱いて離さなかったことからなんとなく理解できた。寝る時も一緒に珠子の甘くて静かな寝息に体の毛が揺れた。まあ悪くない。こここそが俺の居場所だ。俺は珠子の温もりに心を預けてぐっすり眠った。

珠子が小学校に上がった年のこと。朝、仕事へ出かけた満の夫が昼頃に死んで戻ってきた。座敷に敷かれた布団に胸の上で手を組み仰向けに横たわる満の夫は血の気が無くやけに黄色くて、普段より艶っぽくて美しかった。家に近所の住民が次々とやってきて、沈痛な面持ちで満の夫に手を合わせた。使用人の大男と共に学校から帰ってきた珠子は「わあっ」と声を上げて満の夫の亡きがらにすがりついた。その様子に何人かの女がもらい泣きした。俺はその様子を日の射す廊下からジッと見ていた。来客の対応に忙しい満は気丈に振舞った。しかしそれは誰から見ても無理しているのが分かるもので、いつ細い茎が折れても不思議ではない菊の花のような危うさがあった。満が泣いたのは夫の葬式が終わった晩のことだった。心労がたまっていたと思われる珠子が早々に寝息を立てる隣で満は天井を見上げながら声を出さずに泣いていた。俺は何も出来なかった。満があんなにも悲しんでいたのに、俺はただ黙って部屋の隅に丸まっていた。満の夫がいなくなる。一人の人間がいなくなる。それだけのことでいつもの部屋が異様に広く感じた。それがおそらく命の大ききなんだろう。

世間が騒がしくなったのは珠子もおしとやかな乙女になった頃だったな。あちこちから勇ましい音楽が流れて、若い男が一人、また一人と旗を振る大勢に見送られて街から出て行った。俺はすっかりと歳をとった。動きはのろまで近所を散歩していてもすぐに疲れてしまった。次第に日当たりのよい珠子の部屋でのんびりしていることが多くなった。

ある夜、突如鳴り響いた大きなサイレンの音に俺は飛び起きた。珠子も隣で同じように驚いて

いて、蒲団を跳ねのけると部屋の窓から外の様子をうかがった。廊下からドタドタと音がすると部屋の戸が開かれて「珠子、空襲！　すぐに逃げなさい」と満が緊張した顔で言った。

「お母さんも早く」

「私はおじいちゃんとおばあちゃんたちと行くから！」

満が慌ただしく去っていくと、珠子は俺を拾って寝間着のまま階段を下りた。

「珠子さん、早く！」

サイレンがうなる中、玄関の外から使用人の女が手招きするも珠子は満たちが気がかりな様子だった。それと言うのも満の夫の両親が相当の年寄りで、特に父の方は足がやられて寝たきりの生活だったからだ。しかし家の奥から使用人の大男が「任せてください！　私が命に代えても避難させます」と自信たっぷりに言うのを聞いて珠子は家を出た。サイレンが鳴り響く中、大勢の人間が喚いたり泣いたり大騒ぎしながら急いでいた。こんなにも騒がしい夜が今までにあったろうか？　何も知らない俺は珠子の胸の中からぼんやりとその様子を眺めていた。

「こちらです！」

使用人の女に手を引かれ着いた先には大きく深い縦穴があり二十人ほどの人間が入っていた。珠子と俺も手伝ってもらいながらその穴へ入り縮こまった。暗い空からブーンと羽音のような心地悪い音が聞こえるとヒュルルルと何かが空気を裂いて落ちてきて、パッと明るく光った次の瞬間、体を殴るような轟音が鳴って地面が揺れた。周りの人間たちはギャアと騒ぎ、珠子は俺を痛いほど強く抱いた。轟音と震動は幾度か繰り返され、次第に遠のき、グワングワン鳴る耳に眩暈を覚えながら珠子の胸の中で縮こまっていると「ああっ、俺たちの街があ」と穴から外を覗いていた人間が細い声で言った。

「こうしちゃいられないわ。早く火を消しましょう」

人間は次々と穴から出た。俺と珠子も使用人と一緒に穴から出た。あんなに圧倒的な風景を初めて見た。俺の街が天を赤く染めるぐらいに燃えていた。目も焼かれるかと思った。でも目を閉じられなかった。その目を境に満を見かけなくなった。けれど満が突然いなくなったことは前にもあったのだから、と大して気にすることもなかった。俺の心配事は珠子だった。毎日をしくしくと泣いて明け暮れていた。何故泣くのが俺には分からなかった。確かに家は無くなった。けれど親類とやらが家に呼んでくれたし、部屋ももらった。食事だって品数は少ないが昼と晩にはもらっている。それに満にだっていつか会える。

本当に俺は物を知らなかった。満は街が燃えた日に他の家族諸共死んでいたんだな。そして珠子はそれを日々悲しんでいたのだな。何も知らない無知な俺ですまん。なんと愚かで恥ずかしい。

あのうるさいサイレンが鳴らなくなって世間に活気が戻り、珠子が泣かなくなった頃、女学校を卒業した珠子は早々に結婚した。珠子の夫は満の夫とは違い表情がない。まるで岩のような男だった。性格もつまらん。終始偉そうで笑うことがなかった。それでも満の父のように俺を嫌わなくてくれたのには感謝したい。満の夫のように俺に愛想を振りまくようなことは一切なかったが、邪険に扱うことも無かった。その頃の俺は身体の調子がよろしくなく、ネズミを追うことも出来なくなり、家の中でじっとしている事が多かったので置物のようにでも考えていたのかも知れない。使用人のいない家で朝から晩まで忙しい珠子は時間が空くと縁側に出、俺を膝に抱いて空を見上げた。そして俺の背中を撫でるのだ。その手は満にとってもよく似ていて、俺はしばしば時間の間隔を無くした。

「あなたには私より先に死んで欲しくはないのだけれど、すっかり猫の寿命を超えているのだものね。それでも一日でも長く生きて頂戴ね。お願いよ。お願いよ」

リズムを付けて歌うように語りかけてくる珠子の声は心地よく、俺はいつも途中で夢に落ち、そこには満もいるし満の夫も使用人たちもいる。もちろん珠子もいて時々珠子の夫もいた。

珠子の腹が膨らんだ時も珠子の夫は表情を変えなかった。珠子が女の子を産んだ時も同じ。そんな事が二度あった。新しく家族に加わった二人の女の子も珠子の子供のころに負けず劣らず活発だった。興味に惹かれるものがなくなり、暇になると俺にちょっかいを出してくる。珠子の子供の頃の俺ならまだそれに付き合う体力があった。しかしその頃の俺の老体では気力そのものがなかった。それをつまらなく感じたのか長女が俺を抱えて庭に放り投げようとした事がある。偶然そこに出くわした珠子の夫は細い眼を見開いて「やめんかっ！ お前は家族に何をするんだ！」と何やら言って一喝し、長女の頬を叩いた。感情を露にした珠子の夫を初めて見た。長女はその場へへたり込み、わんわんと泣いた。珠子の夫が去った後、俺は泣きじゃくる長女の前で丸くなった。なんだか悪い気がした。けれどその日以降、子供たちが俺を乱雑に扱うことがなくなった。それは別に俺なんかを相手にせずとも良くなったからかも知れない。世間には目を引く珍しい娯楽が次々と現れたんだ。その中でも大きな物がテレビだろう。外出せずともテレビには外

の世界が映る。俺もすっかりと虜になってしまい、一日中テレビの前で過ごす日も少なくなかった。そんな生活がすっかりと長引いて毎日はなんら変りの無い昨日となった。

珠子の二人の子は大きくなると家からいなくなった。たまに帰ってくるのがあったが、その時にはいつの間にこさえたのか子も一緒だった。そんな時、珠子は本当に嬉しそうで、その様子を見た俺も心が温かくなった。

まるで永遠にも感じられる時間の中で珠子も夫も年老いた。珠子の子たちの子もさらに子を産んだらしいのだから当然と言えば当然だ。しかし当然出ないのが俺だった。死なない。年は老いたものの俺はずっと昔から生きている。たまに不審そうな顔で珠子の夫やら子らに顔を覗かれたことがある。おそらく疑問はそれではなかったろうか？ けれど俺が死なないのは俺の責任ではない。それに珠子は俺の長寿を喜んでいるようだった。ほとんど動かなくなってしまった俺を膝の上に乗せては、何やら話しかけてきたり歌を歌ったりした。返事はできる時とできない時があった。耳は聞こえづらくなったり目も見えにくい。鏡に映った姿を間近で見た時、俺の目は白濁していて、これでは見えにくくても仕方ないと妙に納得した。

おっと、長々と昔を思い出してしまった。すっかりと陽が落ちてしまっている。百の歳を取って化けた今の俺は頭がやけにすっきりとしていて、考え事を始めるとついつい長くなってしまうんだ。この癖はなんとかしなければと思う。月も出た。そろそろ家に帰ろう。珠子が独りで待っている。

今の俺は矢のように素早く走れた。身体は軽く足もよく動く、目も明瞭であるし片耳であるが虫の囁きを拾うこともできる。こうなる者がどうして俺であったのかはわからない。唯一つ思い当たるのは野良に右耳を奪われた時、助けてくれた真白い猫の存在であるが、それは後々考えることにしよう。時間ならたっぷりある。俺にはそんな確信があった。

現代建築の家々が並ぶ中に申し訳なさそうに建つ古い家屋。それが珠子の待つ我が家だ。ひっそりとした黒塗りの木造家屋は居間の窓から寂しい光を放っていた。俺は玄関の脇にある通り穴を抜けて家に入る。珠子の夫が作ってくれた通り穴だ。結局、珠子の夫が生きている間は数えるほどしか使ってやれなかった。もう少し俺が化けるのが早ければ「お前は大変立派なものを作った」と褒めてやれたのに遅かった。だからせめて他の窓が開いていようがこの穴を使うのがあ

の男への礼儀というか供養というか感謝というか、そんな感じがする。

暗い廊下を進むと少し開いた襖から光が射していて俺は立ち止まり中の様子をうかがった。弱い扇風機を浴びてテレビを覗いている珠子の年老いた姿があった。とうに八十半ばだ。それでも子供の頃の名残はあるし満の面影もある。

俺が隙間からそっと入ると、珠子はすぐに気づいて嬉しそうに目を細めた。俺は指定席である珠子の膝の上に乗る。珠子の夫がいなくなってもうすぐ二カ月。珠子は葬式の時に少し泣いただけですっかりと元気だ。それはどうやら珠子の夫が十分に生きて大往生したのが理由らしいのだが、俺は珠子が亡くなった時、涙を流さずにいられるだろうか？ 母が死んだ時、満が死んだ時、何も知らない俺は泣かなかった。けれども今の俺はみんなの存在を重く強く感じている。何より死をはっきりと理解している。

「お腹、空いたろう？ ご飯にしようか」

珠子は言って立ち上がり、俺はゴロンと畳の上に転がった。珠子の用意したご飯は満から受け継がれた粥だ。置かれた皿に俺が口をつけると珠子は「お前は本当に変わった猫だね。随分と長生きしたと思ったら今度は尻尾が一本増えちゃって」と俺の背中を撫でた。俺は口を休めて顔を持ち上げると珠子の目を見る。

「きっとその新しい尻尾にはお前を大切にしたいみんなの想いが詰まっているんだろうね。立派だよ。いつか私の想いも受け取って欲しいな」

ゴシゴシと額を親指でこすられ、古びた首輪の鈴がシャンと鳴って俺は一滴の涙を落した。幸せだ、俺は。この広い広い世界の中で、この小さい小さい俺は、きっと誰も知らない、理解も出来ないだろうが、何者よりも恵まれている。この胸の熱さがその証拠だ。

食事を終わるとまだ早いうちに珠子は寝てしまう。俺は家の屋根に上がって、昔より狭く星が減った空を見上げる。

「……」

空のむこう。誰かが俺を呼んだ。耳をすませてみよう。

「……」

ほうらやっぱり呼んでいる。懐かしい声だ。嬉しくなる声だ。

「あんず」

満がくれた宝物。俺の名である。